
剣豪を目指す道

メラメラメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣豪を目指す道

【Nコード】

N5234T

【作者名】

メラメラメ

【あらすじ】

史上最強の弟子の世界に転生した主人公が、真面目にその世界で生きていく事を目標に頑張っていく物語

これは松枝名 俊 様の史上最強の弟子ケンイチの二次創作です。

プロローグ（前書き）

注意 作者が未熟なので変な所が多々あるかもしれませんが
基本的作者の自己満足の作品なので、ご都合主義の要素が含まれま
す

ご都合主義などの要素が嫌いな方は読まない事をお勧めします。

プロローグ

荒涼高校一年入学して一ヶ月経った日

長かった・・・

そう考えている俺……佐々木 一騎は余りにも未熟だった。この史上最強の弟子の世界に転生したがいいが Fate のアサシンの能力を貰った俺は、自分が強いと慢心し、達人に挑みあえなく敗北した

其の頃から地獄だった

毎日剣の修行と称し拷問のような日々、ある日は、急に刀を持たされ、重りを付けられた状態で組み手、そしてある日は重りを体中に付けられ水の中に沈められたり、そして、今も組み手の真最中であつた。

「参る！風三連」

体を前進しつつ、前方の扇状に下、上、中に刀で三連突きを行う、その一つ一つは確実に人体の急所を狙っているが、対峙している相手が悪かった。

「…あまい」

そう一言告げられ、三連突きは敢え無く、刀で弾かれ、その少しの隙に、手裏剣を放ってきた

手裏剣は、あくまで牽制と思われ、直接には襲ってこないで、顔のすぐ真横を通り過ぎていった

じわり、と汗が額から流れ落ちる。だが一瞬でも気を抜けば、すぐにまたやられる。自分の持つ

ている刀は、太刀と呼ばれ、自分の身長と同じくらいの大ささを持った刀だ。下手に振れば、そのぶん隙が多く、その間に反撃されれば一瞬で終わりだ。これだけは気をつけなければならない

ならば

「石花！」

太刀を少し斜め上に斬り払う。太刀の大きさをうまく使った技で、前方を大きく前動作などなく

ノーモーションで高速で刀を振るう

更に

「覚悟おおお！ 雀刺し」

刀を前方に低い姿勢で持ちながら移動しつつ斬っていく。だが、それも、やはりというか

弾かれていく。このままいけば負けることは間違いない、なら最後にやるとしたら派手に決めるか。

「ぬおおおお」

弾かれた刀を全力で元の位置に戻し、突き刺すように構えなおす。直後、相手がこちらに、走ってくる

走っているにも関わらず、きっちり刀を構えながら向かってくるのを見て思わずため息が出る。

「まだ、終わるわけにはいかん！」

必死に刀を向かってくる相手に、連続で突き出していく。ガキイン、ガキイン、金属がぶつかる様な音が響いていく。

すぐ目の前に迫ってくる相手に、渾身の突きを突き出す。

ビュン

鋭く風切り音が出る中、刀はむなしく中を斬った

それと同時に首に衝撃がくる

「…無念」

「最後の…よかったよ」

先ほどまで戦っていた相手の声を最後に意識を失う

プロローグ（後書き）

はあ・・・やっちゃった感じがしない・・・

第1話（前書き）

とぞ

名前が間違っていると報告を受け修正

第1話

第1話

「うつ、また負けたか」

呻き声を上げながら、起き上がると、見慣れたベッドにいる事を気づいた

「おやおや、今日もやられたのかい」

後ろから聞きなれた声の主がやってくる

「ああ岬越寺殿。毎度の事ながら、すみません」

「御安い御用さ、それにしても、手加減しているとはいえ、しぐれに攻撃を当てるなんて凄い進歩じゃないか」

「進歩ってどれくらいですかね？」

「そうだね、蟻が蝶になるくらいの進歩だね」

今話している人は岬越寺 秋雨、【哲学する柔術家】の異名を持

つ岬越寺疏柔術

の達人。書画・陶芸・彫刻・演劇・音楽・茶道を何でもこなし、それに医師の資格も

持つていて、いつも怪我をしたときは世話になっている

「当てましたっけ？」

「君の最後の一撃がしぐれの服に掠ったんだよ。それと学校遅れるよ」

そこまで言うつ岬越寺は怪我の具合を見て退出していった。

改めて辺りを見渡し、時計を見ると学校の登校時間をあと少しで終わりを迎える

時刻であった。

「やばいな」

急いで病室から駆け出て、廊下を走っていく

「ほっほっほ、いっちゃんも朝から精が出るのお」

「あ、長老殿。おはようございます」

庭先を走っていくと立派な髭を生やした巨体の老人がいた。この老人はこの梁山泊という数々の豪傑達が集まる。ここを纏め上げる長老、【無敵超人】の異名を持つ武術の達人

門までつくと、自分に刀を教えてくれる師匠、香坂 しぐれ がいた。

【剣と兵器の申し子】の異名を持つ香坂流武器術の達人だ。東洋では最強と呼ばれる

ほどの武器使いである。

この世界に転生した初期の時、アサシンの剣技を受け継いだ俺は自らが最強だと思って

東洋では最強と言われた武器使い…香坂 しぐれ に挑み惨敗した。

負けた理由は、慢心もあるし、最強だと自惚れていた俺は鍛錬をきちんとしていなかったこと、など色々有る

惨敗した時から鍛錬をするようになり、修行しては挑み、修行しては挑みと繰り返している

内に、いつのまにか、弟子にされていた。

今日も朝早くに、日本刀を持ち出して挑みにかかったが、一撃当てるようになったくらいで負けた。

「しぐれ師匠、おはようございます」

「うん…おはよう」

「では、いつてきます」

「帰って…きたら、また続き…だ」

その事に一瞬、顔を引きつると、師匠の肩に乗っていたネズミ？が降りてきて
小さなヌンチャクを振りまして、修行をやれ と言っているような動作をする

「闘忠丸、分かったから、そのような動作をするな」

「チュチュ」

闘忠丸は、それっきりまた師匠の肩に登っていった。この闘忠丸は、正直、下手な人間よりも頭が賢く、師匠の相棒を勤めている。本当にネズミか？これと思うことが多々ある

常人では開けないと思う、かなり重い門をなんとか開けて、学校に向かっていく

途中、同じクラスと同級生が学校に向かって走っているのを見つけた

「兼一殿、寝坊か？」

「え…やあ佐々木くん」

後ろからの声に反応したらしく、振り向いてびっくりしながら返答してくる

この白浜兼一は、今はまだ苛められっ子だが、この世界の主人公で、才能が

無いにも関わらず、不屈のような心で頑張る青年だ

「では、私は先に行くぞ」

「あつ！待ってよ佐々木くーん」

足に力を込め学校に向かって走っていく。修行のお陰で兼一とかなりの差をつけて走っていた。

なんとか時間内に学校に着いたが健一は間に合わなかったらしく、教師が先に
教卓についてしまった。

教師が何か言おうとした時「おはようございます！！」と廊下から声が来た

やはりというか、兼一であった。兼一はそのまま教師に追い出されるように教室
から出て、廊下で立つことになった

「あ、途中だったな。彼女がこのクラスに転校してきた風林寺美羽

君だ！！」

ん！？あれは確か長老の孫だったかな？直接的には話したこと無いが師匠に挑む時に何回か見たことがある。

それからというものは、半ば眠りそうな授業を聞き過ぎていった。

「こらあ！佐々木寝るなあ！」

訂正、授業を寝て過ごしていた

たまに飛んでくるチョークを避けながら寝るという凄技を出しながら授業を終えた

「兼一殿、また空手部に行くのか？」

放課後、兼一が所属しているとい空手部がある校舎のほうに向かっていく健一を見て呼び止める

「あ、佐々木君、まあいかなきゃならないしね」

「あのような所、さっさと辞めたほうがいいと思うのだが」

「そうだぞ、フヌケンどうせ続きやしないんだ」

兼一に空手部を辞めるよう説得するが後ろから追撃するような言葉が飛んできた

「む、これは新島殿か」

「なんだ、佐々木か」

新島春男、兼一の友人？いや悪友らしいが、学校では良くも悪くも平均を保ってきた私には特に反応を示さない

あ！、このあと師匠との訓練があるんだった。速く家に帰って準備していかねば不味い

「急ぎの用があるので、ではな」

ステータス（前書き）

修正、修正

ステータス

佐々木一騎

クラス アサシン

性別 男性

身長 172 cm

体重 65 kg

筋力 D

耐久 E +

敏捷 C 魔力 E

幸運 C +

追撃：D

離脱行動を行う相手の動きを阻害する。

相手が離脱しきる前に、一度だけ攻撃判定を得られる。

蛮勇：E

向こう見ずな傾向。

同ランクの勇猛効果に加え、格闘ダメージを向上させるが、

視野が狭まり冷静さ・大局的な判断力がダウン

直感：D

戦闘時、つねに自身にとって有利な展開を”感じ取る”能力。
攻撃をある程度は予見することができる。

気配遮断：C

気配を断つ。隠密行動に適している。

完全に気配を断てば発見する事は難しい。

燕返し

対人魔剣。最大補足人数・一人。同時に発生させる三つの斬撃の円
によって相手を断ち切る絶技。

多重次元屈折現象というもののひとつらしく、ゲイボルグとは違った意味で回避が不可能な技である。

史上最強の弟子の世界に転生した人、転生当初は自分が最強だと自惚れており、達人の香坂しぐれに挑み

惨敗した、当初は無謀にも達人に挑みかかっていたので、達人と戦うことで、自分の力量を知り、無謀な事

や慢心などがしなくなった。これにより蛮勇がAからEに下がった

原作知識に関しては徐々に失っている

目上の人には敬語を使ったりする

第2話（前書き）

なんとか書き終えた・・・けど駄文

第2話

第2話

今日も今日とて早朝に挑みに梁山泊に行ったが、やはりというか返り討ちに。

仕方なくボロボロの包帯だらけのまま、学校に行くことになった。

いつもと違って、今日は登校する時間が早く歩いてても間に合いそうなくらい時間が余っていた

原作では、確か兼一殿が梁山泊に弟子入りするんだっただか？いやどうだったか

学校に着くまでの間、原作を必死に思い出そうとするが、もう記憶がはつきりと覚えておらず

中途半端な所しか思い出そうにも思い出せないでいた。

それもそのはず、もうこの世界にきて16年経っているのだ。前世で読んだ物自体だいたい忘れてきているのだ。

普通の人ならそれを何かに記したりするだろうが、あいにくだいたい忘れてからその事を思い出したので後の祭りだ。

そうこう考えているうちに荒涼高校に着いていた

余りにも早すぎるので校舎の中をきちんと場所を把握しようとして、うろついていると、明らかに不良がいますよ

的な部室を見つけた。そこには美術準備室と書いているが壁には、らきがきのような物が施され、無残な部室になっていた。

「やはり、こういう所もあるのか」

美術準備室を一瞥して、次の場所を把握しにいこうとした。その時、後ろから何者かに肩を掴まれた。だが、それに特に反応することもなく、前に行こうとすると

肩を掴む力が強められ、振り向かせようと引っ張ってきた。

「どうかしたか？」

「どうかしたかじゃねえ！ここは俺らのなわばりだ。先進むなら通行料払えよ！」

引っ張ってきた者に対し、聞いてみたが、返ってくるのは明らかに挑発めいた言葉のみ

仕方なく振り向いてみると、不良めいた男が10人、何人かはバットなどの鈍器を持って

こちらに、ふざけた笑いをしている。

「断るといつても？」

「へえ俺らとやろうつてのか？」

「げへへ、やっちまおうぜ」

断りの一言を入れた瞬間、不良達は一斉にバットや木刀などを構えて取り囲むように移動していった
先ほどのリーダー格と思わしき、話していた不良は話を終わった時に金属バットを片手に殴ってきた
さらに他の不良もそれに追隨するようにバットで殴りかかってくる

「ふん！」

「ぐう」

木刀で殴りかかってくる不良を、カウンター気味に拳を鳩尾に入れ、倒れさせる

そして即座に木刀を奪い取り、殴りかかってくる不良達に木刀で一太刀の元、気絶させていく。

途中「ぐえ」「ごふあ」など呻き声を上げていくが、気絶しなかったものには、さらに

木刀で叩きのめしていく。

「さて残りはお主だけだぞ？」

「ち、ちくしょお」

最後に残ったのは、先ほど喋っていたリーダー格のみ、いやわざと残らされたいんだ。

リーダー格の不良は周りに倒れている不良たちを見て、自分が不利になったことを悟り顔を青くしながら駆け逃げていった。

「ふむ、もうこんな時間か」

時計を見ると生徒達がだいたい揃う時間になっており、教室に向かうことにした。

だが、先ほどの事を見た人がいるという事を知らずに……

S i d e ? ? ?

「キツヒツヒツ、まさか佐々木がこんなにやるとは知らなかったぜえ、ガクランに修正
いれないといけないぜ」

懐から学園ランキングという物を取り出して、密かに呟いた

第3話（前書き）

大幅修正しましたぞ

第3話

第3話

教室に着くと教師が既に教卓に着いていた

ガラガラ、教室の扉を開ける音に、反応して何人かの生徒がこちらを見てくる

「なんだ〜佐々木、遅刻か廊下で立ってなさい」

「承知」

一言、応答の言葉を言い、そのまま教室に入らず、廊下で立っていることになった。

しかし、ただ廊下で立つのも余り味気ないので、壁に耳を立て、朝の会がどのくらい終わったのかを聞いていた。

そこへもう一人の遅刻者がやってきた

「あ、佐々木君も遅刻か」

「兼一殿もか…」

それだけ言うともう一人の遅刻者、白浜兼一は、教室に入りに入った。

案の定、兼一は黒板消しを当てられ、教師に怒鳴られる中廊下で立つ事になった

まあ無理もない。今日で二人目なのだ、教師も一人目ならまだしも二人となると怒鳴りたくなるだろう。

「災難だな…」

「うん…佐々木君も災難だね…」

横にいる兼一に慰めの言葉を言い、遅刻者同士、仲を深めていった。

相変わらず眠たくなるような授業（特に英語とか、特に英語とか、特に英語とか）を

聞き過ごしていき、昼休みになった。

今日は師匠が持たせてくれた弁当を食べてみることにした。

「なんだ…この盛り付け…」

弁当箱を開けると、絶妙な位置に積み重なっている餃子、ご飯も三角のような形になっているが
これをお握りとは言えないくらいだ。

「師匠…これは一種の修行ですか……」

仕方なく餃子を食べてみようとするが箸を付けた瞬間崩れ落ちた。
幸い弁当箱が大きかったお陰で
餃子は助かったがなんとも言えない気持ちに…

「あ、意外と美味しいな」

崩れた餃子の中から一つ餃子を箸で取り出し食べてみたが、ほどよく焼けていて美味しかった

結局お握り？も食べて、餃子も食べきってしまった。
ただ…ただ一つ残念だとすると盛り付け方が駄目だ…

午後の授業も適当に聞き過ごし放課後

「ではな、兼一殿」

「あ、うん、また明日」

軽く帰る事を伝えて学校を出る。ちなみに部活はやっていない。連日放課後や早朝に修行に師匠に挑みにいくからだ。ただでさえボロボロにされているのに部活をやれば、体力などもったもんじゃない。

いつものように自分の家に帰ろうとすると、前方から人が何人かきて、進行方向を塞いでしまった。よく見ると今朝倒した不良達がいた。しかし、数は今朝倒した数より遥かに多く数十人にもものぼる数であった

「よお今朝はやってくれたじゃん」

「はて？何のことかな？」

「ちっ！てめえ！」

あの時逃げたリーダー格の不良が前に出てきて不適な笑いをしている中、話をしようとしてくるが軽く挑発をすると、短気ならしく片手に持っている鉄パイプで殴りかかってくる

「おっと」

「避けるんじゃないねえ！お前らもやっちゃまえ！」

鉄パイプを避けると、それに怒った不良は周りにいる仲間に命令する

しかしながら、数が多い。さらに相手は鉄パイプ、金属バット、木刀と凶器を持っていて、こちら鞆だけと丸腰に近い状態だ。

他の不良達も各々の武器を持ち襲ってくる中、大振りで武器を振りかぶってくる者を徹底的に狙いをつけ、腹にカウンター気味にパンチを入れていく

「ぐふ」

「こんな事なら日々の護身用武器も持っておくんだっとな…」

次々と、襲い掛かってくる不良達を後目に、倒れている不良の木刀を奪い、突き刺すように構える

「一芸、披露仕る」

風流し

殴りかかってくる不良を木刀で受け流して、よろけている所に木刀で止めを刺す

もう地面に沈んでいる不良は裕に10人は超えており、残っているものも、だんだん

戦意を喪失していつている

「どうした？こないなら此方からゆくぞ！」

動きを止めて、戦意を喪失しかけている者に向かって走り出す。途

中倒れている不良

を何人が踏んだ気もするが、そんなの知ったこっちゃない

「はあ！」

手に持っている木刀で顎を鋭く突き、昏倒させていく。もう木刀は、金属バットなど

を受け流したりしていたので、罅が入って折れそうなくらいになっている。

「ふう、これで終わりか」

最後の立っている不良を沈めさせ、一息ついた直後

ガッ

何かに反射的に体が反応し、木刀を盾のように体の後ろ側にやる。そうすると、それから

ほんの数秒後、木刀に鋭い重みがくる。

どうやら、まだ不良のリーダー格が完全に沈んでいなかったようだ振り返ると、金属バットを両手に、動揺している不良がいた。

「ふむ」

動揺している不良に目掛けて、体を前に出しながら、木刀を鳩尾目掛けて、突き出した

バキィ

「グエ」

木刀が不良の鳩尾に当たったと同時に罅が入った部分から、もう使いようにならないくらい。完膚なきまでに折れた。木刀を鳩尾に完璧に食らった不良は、口から泡を吹き出しながら気絶していった。

「短い間だったけど世話になった。」

元はいえ不良の一人が持っていた武器だったが、少しの間戦ってきた木刀に別れを告げ、木刀を捨てて。

しかし、たかが不良如きにこんなにも時間がかかるとは思わなかった

腕時計を見ながら、自分がこんなのが相手にどれだけ時間が掛かったのかを見て、修行が足りないと思えて思う。

自分が再起不能にした不良達を通行人の邪魔にならないよう、適当に路地の中に一人ずつ放り込んで、修行をしに、梁山泊の所へ向かう。

第4話（前書き）

ははは、大幅修正だ。しぐれさんの喋り方難しいです

第4話

第4話

「師匠、流石にこれはきついと思うぞ…」

「大丈夫…夫」

大量の重りを付けられた状態で師匠との打ち合い
どうしてこんな状況になったかは、簡単な事だ。

あのあと梁山泊に着いたのだが、師匠の所へ向かっている途中、岬
越寺殿に遭遇しほんの少しだが

不良との戦いの時に、顔についた傷を言われ、何があつたかを執拗
に聞かれ、思わず答えてしまったことから始まった。傷といっても
ほんの擦り傷なのだが…

岬越寺に重りを大量に体に付けられ、その状況で師匠と打ち合いを
しろと言われてしまった。

自分の未熟は認めるが、これは余りにも酷すぎないか？…

ビュ

少しでも油断をすれば、風切り音と共に顔のすぐ横を刀が通り過ぎ
ていく。

ははは……

少しでも抗おうと、体と同じくらいの大きさの太刀を袈裟斬りから逆袈裟斬りなど、太刀をベクトルがバラバラ斬り方をして師匠に攻勢に出られないよう、できるだけ自分から攻勢に出て、攻める。ただでさえ重りが重くて攻勢に出るのがきついのに、その状態で守勢になると、相手が手加減しているとはいえ、この長い太刀では防ぐのはきついだろう。

師匠に、斬りかかりながらも、太刀に力が入るように全身を合わせながら、長い刀を生かして、太刀を師匠に一定の距離を保ちながら、斬戟を放っていく。

だが、まあそれとも簡単に師匠が持つ刀に防がれる。普段の自分だったら、もう少し良く戦えただろうが、今は重りのせいで太刀を振るうのがせいっぱいだ。

ヒュ

またも、師匠の刀がすぐ横を通りすぎる。必死に体を逸らしたおかげで傷が負わなくてすんだが、今の絶対怪我するだろ……

「し、師匠、何か怒ってませんか？…」

「ん…別に…」

絶対何か怒ってる…。しかし何か怒るような原因があったか？一刻も早く怒っているなら怒りを冷まさないで、この状況はやばい。しかしながら、今まで、怒らせるような事したっけ？…時々馬剣聖殿と一緒に梁山泊にある風呂を師匠が入っている時間に覗きにいった事ならあるが…

だが、それも必ず失敗に終わってるし、いつも馬剣聖殿に風呂に向かう時のトラップの盾にされるだけだし……

あ…それが

この覗きの件がバレタのか…、いや、でも馬剣聖殿が覗きとして師匠に捕まっているから大丈夫なはず…だと思いたい。馬剣聖殿が捕まった時に見捨てたから。もしかして売られた…？

この間役十秒、襲い掛かってくる刀を全力で避けながら、考えている

「師匠、覗きの件は申し訳無い思っている！どうか怒りを収めてください」

刀を避けた瞬間、持っている太刀を横に置き、土下座をしながら謝る。今まで持っていた誇りを捨てた見事な土下座だ…

「違う…」

へ？

「では、何か怒らせるような事しましたっけ…？」

おそろおそろといった感じで、訊ねる。もちろん、土下座をしている状態だ。この状況で軽率な行動をすれば、怪我をする事は確定である。

「自分…の弟子…がこの有…様じゃ情けない…と思つて…な」

「も、申し訳ない！」

「もう…いい…」

「へっ？」

顔を上げると、手にはまだ刀を持っている師匠がいる。とりあえず横にある太刀を手に持ち立つと
師匠が言う。

「今からやる…事…避け…ろ…」

そう言った瞬間、師匠の刀が襲い掛かってきて、それを太刀で受け止めようとするが、受け止めた瞬間
師匠が、太刀の弱点である懐に入ってきて、そのことに反応できずに首筋に鋭い痛みがきて終わった

「覗…きの罰…だ…」

師匠のその言葉を最後に気を失った

「岬越寺殿毎度の事ながら申し訳ない…」

「いや、いいって事さ、それと君の新しい修行メニューができたらしい」

「さ、さらにきつくなると申すのか…」

「フフフ」

岬越寺殿が意味深な笑みを浮かべながら治療して去っていき、自分

はさらにきつくなると思う修行に
少し憂鬱な事を思った。

治療をしてもらったので、梁山泊から自分の家に帰ることにした
意外と梁山泊に近く、徒歩で5分程度で着く

自分の家は、昔の武家屋敷のような家で、両親はいなく、一人で住
んでいる。

正直、かなりの大きさの家に一人だけという状態だ。

師匠の修行が無いときは、よく庭で愛刀の素振りをしている。愛刀
とは、アサシンこと

佐々木小次郎が使っていた物干し竿である。

いくら剣技を受け継いだといっても、まだ剣技に体がついていけず、
無駄な事になっている

この家には、もう既に16年住んでいるということになる。

正直5歳の時まで記憶がなく、両親、親戚という物は一切無かった。
5歳で一人暮らしという

のも、変だろう。

幸いな事にある程度大きくなるまでの食料などは家あり、それを食
べて過ごしていた

10歳辺りになるまで、他人とは、会っていないく、ずっと刀を振り
続けるという事だけ、必死に
やっていた。

「修行帰りだがやるとするか…」

物干し竿を上段に構え、練習用にいつも使っている大きな木に向かって袈裟斬りをする
それだけでは、本来この物干し竿を使っている佐々木小次郎には程遠く浅く木を斬らさるだけであつた。

本来の持ち主ならこの木を両断するのも意図も簡単にできるだろう。

「嵐三連！」

木に向かって前進しつつ、扇状に下、上、中の順番に鋭い三連突きをする。その威力は木を次々と抉っていくが、貫通まではいかに終わった。

それからというものは、袈裟斬り袈裟固めなど基本を反復練習していった。途中、ふらっと目眩がして、体を地面に倒してしまう。

「やはり疲れたなあ」

地面に体を預けながら空を見上げる。そこには夜の空が広がっており、雲などなく

漆黒が目立つ世界であつた。

しばらく、空を見続けたあと、ぼそつと呟いた

「師匠は、この剣が殺人剣だと知ったら軽蔑するだろうか…」

そう、佐々木小次郎の剣技を受け継いだという事は、佐々木小次郎

が人を殺す為に、剣技を生み出した剣を受け継いだということ。

「まあ今はいいか…」

重い体を起こして、武家屋敷の寝室に向かい、今の事を、心に刻み込むように思いながら寝る。

朝、昨日の事を自嘲気味に笑いながら、私服のまま学校に向かう。

昨日の疲れは無くなっており、いつもどおりの姿であった。荒涼高校は私服、制服

どちらでもおこな学校であり、基本は制服でいくが、今日は私服で行くことにした。

さらに、背中には竹刀袋を持っていて、その中には不良に絡まれなように木刀を入れている

いつもどおりの通学路を進んでいき、学校に着くと、びっくりするような噂が飛び交っていた

白浜兼一が空手部の大門寺まこと、に空手部の所属を掛けて一週間後勝負をするという事

1 - Eの教室に着くと、その件の人物が机に沈んでいた。

「兼一殿、骨は拾ってやる…」

「最初から負けるような事いわないでよおお」

白浜兼一は、負け前提で言った事に、少しは腹を立てたのか、こちらに言い返してくる。

だが、兼一が喧嘩を売った相手と言うと、過去3人病院送りにしたいう、問題児に喧嘩を売ったのだ。

そこへもう一人の人物が近づいてくる。

「あ、兼一さんと、えつと？」

「佐々木一騎だ、よろしく頼む。風林寺殿」

「あ、はい、よろしくお願いします。それと空手部はどうでした？」

「ボクはもうおしまいです…」

さっきまでと偉い違いようだ…。まあ勝利が絶望的というのは変わらないが、しかし、兼一殿の話を聞くと

強者のみに武術をやる資格がある、か…まあ裏に漬かっていない表

の住民ならそういう考えの輩もいるか。

だが、友人がやられるのを黙ってみるつても駄目だな
さらに問題児の不良なら周りに取り巻きがいるのも確実だ。

「風林寺殿、少し兼一殿を頼む」

「え、ちょっと」

返答の言葉も待たずに、大門寺という輩を調べに行く。

案の定、その男は、校舎裏にて数名の男と絡んでいた。見ると大門寺という男は、その数名の男に、媚へつらっているように見える。

気配を遮断し、なりゆきを見つめると、大門寺のバックのような不良組織があるらしい、恐らく大門寺、他数名はその組織の構成員か何かだろう。

集まりが終わったらしく大門寺が去った所で、数名の男達に気配を遮断したまま近づき、その前に出て気配を現す。

「なっ！てめえどこから現れた！」

「流石に友人がやられるのも見過ごせないのにな、ここで退場お願い仕る」

手に持っている木刀で一人の男に、袈裟斬りをする。その男は、突然の事に何がなんなのか、分らないという表情でわき腹を木刀で斬られ倒れ伏す。

「うらあ!!」

一人の男が此方に飛び蹴りをしてくる

風流し

ひらりと飛び蹴りを受け流し、飛び蹴りが失敗してよろけている所に、鋭い突きをする。

「くふっ」

その男は此方を睨む様な目つきをしながら、倒れ伏した。その他の男達も、二人倒した事によって蜘蛛の子散らすように逃げ出していった。

「これでいいか…」

これで大門寺とやらは、もう不良のバックや取り巻きが存在せず、一人になった。

あとは兼一殿が勝ってくればいいのだがな…

第5話（前書き）

この話は修正しようがない…

第5話

第5話

一週間後、兼一の最後の日っ間違えた。兼一の試合の日

授業はいつもどおり聞き流して、放課後、気配を遮断して空手道場に向かう。

空手部は、主に態度が悪い奴など大勢いるから、普通に、違う部の生徒が見学にいったら

目を付けられてしまう可能性がある。

「はじめ!!」

審判を勤める、短髪の男が声を上げる。

それと同時に、大門寺が腰から力を込めた拳を兼一に突き出した。兼一はそれを腕を十字にして、受け止めるが、兼一の体はまるで、紙のように、吹っ飛んだ

「場合によっては、兼一殿を援護せねば…」

審判に場外と宣告された兼一はまだやると、答える。だが足がまだ震えている。だが雰囲気が変わった!

兼一は突き出された拳を、自分から前に出て、大門寺の背後に回った。

あれは…中国拳法！

確か扣歩・擺歩だったか、攻撃を躲するための八卦承の歩法だったはず、ふと上を見ると風林寺美羽が此方に手を振っていた

「なるほど、あやつが、兼一殿に入れ知恵をしたのか」

フツ

此方も不適に笑うと、驚いたような顔で見てくる。しかし、躲しているだけでは倒せないぞ兼一も分かっているのだろうか。

大門寺の拳を避け、右わき腹に兼一の今の最大の攻撃とも言える拳を入れた

だが、普段鍛えていない兼一の拳では筋肉の壁を崩せずに、そのまま足蹴りを食らった

そのあと兼一は避け続け、殴り続けている大門寺は疲れてきていくようだ。

大門寺の拳を避けた後兼一はまた、周りこもつとした時大門寺の足に、兼一の足が辺り投げ技の要領というか、足を引っ掛けささったというか、それで大

門寺は倒れた

「これなら、兼一殿も大丈夫だな…」

そう相手はもう疲れきっており、さらに兼一は先ほどの何かを掴んだような表情をしている
恐らく、もう兼一の勝ちだろう

そう考え、空手道場を離れると、先ほどの風林寺美羽がこちらに姿を現した

「風林寺殿も物好きだのお」

「そういう一騎さんは、兼一さんの事ずっと見てましたね」

「フッあのような道化のような輩は今時珍しいのでな…あの技を教えたのも風林寺殿だろう…」

「ええ、兼一さんは、今時珍しい努力をする人ですもの」

「ではな、しぐれ師匠によろしく頼む」

その一言で美羽の顔が驚きの表情になったが、そんな事お構い無しにその場を去った

帰り際に、空手部の審判をしていた男の悟ったような表情を思い出しながら、梁山泊の
しぐれ師匠の所へ向かう

閑話（前書き）

軽く修正。

閑話

閑話

この世界に、転生して10年経った

近所の不良とかも、もう俺には喧嘩を仕掛けてこないで、逃げるだけ

昨日、高校生の不良も、絡んできたから木刀で気絶させてやった。

同年代は皆俺を恐れて

近寄ってこないし。

流石、アサシンの剣技だぜ

体がまだ小さくって物干し竿使えないけど俺はもう達人にも勝てるんじゃない？

家に置いてあった、小太刀を持って、知り合いの剣術家の場所に行ってみた。

だが、そこには見知った剣術家の姿がなく、刀を持った女がいた。ふと、地面を見ると、気絶している知り合いの剣術家に折れた刀があった。

へえあの女がやったのか

「何だ、やられちゃったのかよ、おっさん」

小太刀を持ちながら、女のほうに近づき、気絶している剣術家を踏み、言った

そうすると、女は此方に怒ったように鬨気を当ててくる

「へえ、やるのか」

小太刀を構え、鬨気を当ててくる女に向かう

痺れ鯨

まず、痛ぶって倒そうと、女の斜め下に向けて小太刀を振るう。女は手裏剣を投げてくるが

そんなもん、お構いなしに、小太刀で弾きながら進む

しかし、女が動いたと思った瞬間、小太刀が後ろに飛ばされてしまった。

「くっ！やるじゃん、女ああ！」

腰に差している脇差しを取り出しながら、脇差しで斬り込む。

春雷

女に向けて、横を斬り払いながら、脇差で突き、払い、と攻撃していくが

だがそれも、一瞬で終わり、いつのまにか、地面に倒れ伏していた。

それでも立ち上がり、脇差しを女に向ける。

何度立ち向かっても軽くあしらわれるだけだ、このまま女にやられ
たままじゃ、今まで勝ってきたプライドが許さない

「くそがああああああ」

秘剣・燕返し

無我夢中で放ったそれは、縦軸、横軸の軌道の弧を描く刃を同時に放つ。本来なら、三つの刃を同時に出す技だが、まだ完璧に再現できていないので二つの刃を放つ。ほぼ同時に放つではなく、完璧に同時に放つ二つの斬撃。

女の驚いた表情を最後に、
気絶した

Side
しぐね

「秋雨……拾い物……」

「これは人じゃないか、どこで拾ってきたんだい？」

秋雨に差し出されたそれは、青い髪をした気絶している少年であった。

E
N
D

閑話（後書き）

ははは…燃え尽きたぜ

今日はもう無理だ

第6話（前書き）

はい。懲りない作者がまたきましたよ。
毎日毎日これ書いてる時に鼻血が出るのはなんでだろう

第6話

第6話

学校に通うと、友人である白浜兼一がまたもや机に沈んでいた
また、何かあったのかな、どうせそうでないなら、園芸部で花に水
をやっている事だし

兼一の席へ向かうと、同じような事を考えていたと思われる美羽殿
と目が合った

目線で兼一を指すと、美羽はそれに苦笑しながら頷いた

「兼一殿また何かあったのか…？」

「お花に水やらなくちゃー！！」

しかし兼一は、まるで何かに怯えているようにして、こちらの事に
反応をしめさない

仕方ない、そう思い手刀を形どり兼一目掛けて振るおうとすると何
者かによって手を捕まれる

「む、何をする。美羽殿」

「何をするは貴方の事です！、兼一さんに何するんですかぁ！」

「ちょっと目を覚ますだけだ」

話をそこで切り、再び兼一目掛けて手刀を振るおうとするが、またもや美羽に止められる
ええい！まだ止めるか

「仕方ない、直ったらまた来るか…」

一先ず授業が始まるので自分の席に戻ると、ちらつと見たが兼一が壊れたように美羽と話していたを見た。しかし、また大なんとかの時と同じふうになるとは…

体育の時間

男子はサッカー、女子は、バレーボールをしている中、美羽と兼一と新島が校舎の物陰で何か集まっているのを見て、自分もそこへいく。

校舎の物陰では兼一が体育座りをしていてガタガタ震えている、その横では美羽と新島が何かを話し合っていた。

「兼一殿はまだ直ってないようだな」

「あ、一騎さん」

「よお 佐々木」

ガタガタ震えている兼一はやはりというか、もう負け犬のような目になっており、話に通じていない
何があつたのかを、横にいる二人に聞く

「とりあえず兼一殿のこの原因は何か分かるか？」

「ああ空手部の副将の筑波先輩が近い内しめるって言ってるんだよ。」

「

「兼一殿も災難だなあ」

うん、災難すぎるな。この間やっと危機脱出したと思ったらまた危機が迫ってきてるって……

しかしながら、空手部の副将といえば、この間審判してた男だな。
態度も悪く、教師には物凄く
避けられてて、教師が怖がるぐらいの不良だったかな

「骨は必ず拾ってやるからな」

兼一の肩に手を置き、どや顔をしながら言う。友人なら普通は言わないが、この男の場合、場合がやばすぎる。兼一は武術など一切やっていないのに、相手は多少はやっていてという不良だ。

兼一がこの筑波という男を倒しても、不良として結構名が知られている者を倒したとしてまた違う不良に狙われるという負の連鎖が続く

「一騎さん流石にそれは酷すぎじゃありませんか？」

「まあ佐々木の言う事にも同意できるがなあ」

新島春男が、携帯程度の大きさの機械を手に持ちながら、美羽の後ろに近づいて、そのまま背負い投げをする。スリーサイズを聞こうとしたらしいが哀れ新島…

そのあと美羽が兼一に地図？と思わしき暗号だらけの紙を渡す。そのときの美羽の目は一高校生の目ではなく武道家としての目であった。

その日は特に何もなく、放課後は梁山泊に向かう

「師匠……」

梁山泊に着いたときに既に修行というかそういつのは始まっていた。

道場破りが来ているらしいので、門を飛び越えていくと、何故か師匠の鎖鎌に捕まった

そのまま、道場のほうに拘束されたまま進むと、いかにも武道家とどうか闘気を出している女の道場破りがいた。

「剣と武器の申し子香坂しぐれ、一手ご指南頂きたい！」

「いいよ…ただし弟子…に勝った…らな…」

「ちょ、師匠、いきなり連れてこられてこれですか…」

師匠から道場で使っている太刀と正式な勝負ではいつも着ている青い陣羽織を貰い、改めて道場破りの所へ向き直る。見ると同じくらいの歳
と思われる、顔には刀傷ばかりでそれでいて凜々しい外見をしている。

「女子は斬りたくないが仕方ないか…」

「む！女と思つて見くびるなよ！」

ため息混じりに吐いた言葉に、相手は大声で反論する。

「では始めようか…剣と武器の申し子、香坂しぐれの弟子の佐々木一騎だ」

「月元流、月元彩だ。では！！」

その言葉を最後に二人の会話は終わった。月元彩と名のる女は薙刀を持っており、対する此方は太刀だ長さで言えば薙刀のほうが有利だろう。

まず此方は相手の出方を見るため、太刀を構え、じっと待つ。

「先ほど余裕を見せてた割にはこないのか？」

月元は何もしてこない此方に対して、苛立ちを見せたのか挑発をしてくる。恐らくこの女もの凄く短気だろう。

「ふっ」

挑発をあざ笑うかのように、口元を歪めると、それに怒った月元は薙刀を手に襲い掛かってくる。

この程度の挑発に乗るとは……、内心この子大丈夫か？と思ったが今は勝負中、そのような考えをすぐに捨てる。

ブン！

月元が縦に振るった薙刀を陣羽織をはためかせながら避けると、さらにそこから振り下ろし、突き、薙ぎ、と次々と薙刀を振るってくる。

「では、果たしあおうぞ！」

月元の攻撃をだいたい見切ったので、今度はこちらから攻勢に入る。

「ほれ」

ビュン、シュ

「くっ」

月元に対して、一切の手加減もなく、本気で戦う。その太刀からは変幻自在のような攻撃をしていて
月元は攻勢に出れないでいる。太刀筋は横から斬るように見せかけて縦から斬ったりと、見切りにくい太刀筋である。

「そこだあああ！【月元流、星崩し】」

「むっ！」

風流し

その襲い掛かる薙刀は一見ただの振り下ろしに見えるが、実際は凄く速く薙刀を振り下ろしている。

薙刀を避けれないと判断し、受け流すことにする。薙刀を受け流しながらも弾こうとするが弾けずにそのまま浅く肩を斬られる

「仕方ない」

鬼殺し

太刀を薙刀目掛けて振るい、月元がそれでよろめいている隙に太刀を首に突きつける。一瞬の間で、勝負はついた。月元は何がなんなのか分からないという顔をしながら首に突きつけられている太刀に驚いている。

「女子は斬りたくないのな。敗北を認めるか？」

「あ、ああ、／／／／」

刀を仕舞い、微笑みながら言うと、月元彩の顔が赤くなり、顔を背けてしまった。

そのあと彩は礼を言い、顔を赤く染めながらそそくさと帰っていった。

こうして道場破りの件は終わった。

第7話（前書き）

指摘などありがとうございます。それと間違つてストックを消してしまい
遅れてしまった。今後、一週間、1、2回更新が限度かもしれません

6月6日

はい、一旦修正やら過筆を加えるため次話は遅くなります。

自分でも、色々可笑しいなというところが多々ありますので、それらを修正するので

次話投稿は6月下旬辺りとなります。

第7話

第7話

日曜日

今日は、朝から梁山泊に行くことになった。一応、道場破りにも備え、今度からは自分から愛刀と陣羽織を持つていくことにする。急に渡されて戦えと言われても混乱して駄目になるだけだから、修行に行くときも、予め想定しておく。

「相変わらずの大きさの門だな…」

梁山泊に着くと、そこにあるのはとてつもなく大きく、そして重い門がある。

だが門を開けるのだけに体力を消耗したくないので、普通に横から堀を飛び越えていく。

スタッ

「ふう、む！」

一息吐いたあと、一步前に出ると、侵入者撃退用の罠と思われる、縄を括りつけた丸太が此方に向かって、飛んでくる。

それを、横に飛んで避けると、カチツと嫌な音になった。

「くう！流石にこれは…」

嫌な音の正体は、またもや侵入者撃退用と思われる罠、しかしこんなもの何回か門を

開けないで此方側から来たときは何もなかったのに、何故か罠が増えている

先ほどの踏んだ罠の正体は、四方八方からくる、竹の先が尖っている竹槍であった。

前方の竹のみを背に背負っていた愛刀、物干し竿の鞘で打ち落とし、前方に竹槍がなくなつた瞬間

全力で走り出す。

この間僅か数秒で、危機感知能力とは凄い物だ。

「はあはあ」

気のせいかな、門を開けたほうが良かったきもする。必死に道場のほうまで着くと、その頃にはもう無駄に疲れていた。

「師匠、遅れて申し訳ない…」

道場の中では、既に師匠が刀を構えて待っており、下手に怒らせるはやばいので、早めに遅れた謝罪を済ませておく。

師匠は、それを構わないというふうな動作をすると、鎖鎌を持って此方に怪しい目をしながらにじり寄ってくる

「な、なにを」

「師匠…から弟子への愛だ…」

全力で道場の入り口のほうに駆けるが、流石に師匠は特A達人級、入り口に着いたと思った瞬間体に鎖鎌を巻きつけられた。

しかし、今日の私は違う！

腕の関節を、わざと外し鎖鎌から脱出しようとする。だが拘束が緩んだ瞬間、師匠が目の前に立っていた

「ははは…無念…」

師匠に、また引っ張られ戻されるのを感じながら、間接を戻している。

抵抗しても、もう無理だという事が分かるので、次にくる展開に備えておく

「師匠…？これはいったい何を？」

「…修行だ」

渡されたのは、皓越時殿が作ったと思われる、まるでそれをおぶるような形をしている地蔵。

渡されたということは付けろということか…

仕方なくその地蔵を背中にせおると、師匠が刀を構えたので、地蔵をせおったまま

此方も構える。

直後、師匠の刀が迫ってくる。

師匠が、此方の力量に合わせてくれるのはありがたいが、これでも十分つらい

刀と刀を打ち合う度、段々刀に力が入らなくなり、手が痺れていく。

逃げるように、後ろに下がると当然のように追ってくる刀を避けながら

体制を整える。

すると、道場の入り口辺りから梁山泊に住んでいる人じゃない者の気を感じる

「む！」

「余所見…しちやダメ」

ギン

打ち合いをしているという事を忘れていた所に、師匠の刀がきて、気づいた頃には自分の刀を弾き飛ばされていた。

師匠に謝り、弾き飛ばされた刀を取りに向かう。

その間、師匠が急に道場の畳と畳の間の襖に刀を差し込む刀が差し込まれた場所から、畳ごと馬剣聖殿が出てきた。

「なんだ…いつものことか…」

大方、剣聖殿が師匠を盗撮にきたんだろう。ほぼ毎日のように起こる事だ。

既にこのことには耐性がついている。

剣聖殿には個人的に頑張つて欲しい、盗撮した写真を時々買っているからだ。

まあ、なかなか高い値段だがその価値がある。

もちろん、買っていることは師匠やその他の人達には秘密だ。自分の家の秘蔵の金庫の中に入れている。

思考が逸れてしまったな。

弾き飛ばされた刀を拾い、外に出るとアパチャイ・ホパチャイ殿が何故か、岬越寺殿

の作った地蔵を大量に破壊している。

いや地蔵だけではない、梁山泊に生えている木も蹴りで折ったりしている。

もうそこかしこが地蔵の残骸だらけだ…

「何が起こった…」

目の前に起きている事を逃避しながら、辺りを歩いていく。

第8話（前書き）

繋ぎだから短い。やっと更新したのに短い
しかもフレイヤと合わせたかったのに何故こうなった

更新再開しますよゝ

第8話

第8話

あのあと目覚めた兼一が、この梁山泊に弟子入りすることになった。友としてなら止めたいところだが、兼一自身が意思をはっきり持っていたので止めないことにした。

というか、おそらくこのままだと兼一は件の筑波という輩に殺されはしないだろうが大なり小なり怪我を負わされる可能性があるだろう。

そして今、兼一は真っ白に力尽きていた。

「大丈夫か？」

落ちていた木の枝で力尽きている兼一に、ちよん、ちよん、と突いて生きているかを確かめる。兼一がこうなった理由はたぶん修行の辛さだろう、岬越寺殿が乗ったタイヤを三つ先の駅まで走っていくなど、今まで武術などをしていなかった兼一の体力では持たないだろう。

「うう、もう無理いゝ」

「おお無事であったか、見つけた時には既に事切れてると思ったぞ」

「あんなの修行じゃないよお…」

「まあそう言っな、兼一殿。今やらなきゃ兼一殿があの先輩にやられて困るだろう」

「うう確かに…」

少し話している間に、兼一が多少は動けるくらいに体力が回復したようだ。だが、まだ完全に動けないので、よろ、よろ、と倒れそうなくらいな状態だ。

ふと空を見上げてみると、そこにはもう夕暮れの景色になっていた。時刻も6時を回るだろう。

「では兼一殿、先に帰らせてもらっ」

「あ！つちよ佐々木君待つてよゝ」

ボロボロな健一を放っておいて、梁山泊を後にして家に帰る。

気ままに歩いていく内に段々と周りが暗くなっていく。

「今宵は良い月が出そうだ…」

近道に細い裏路地に入ると其処には異様な光景が広まっていた。

裏路地には数十人にも上る数の不良と思われる。男たちが呻き声を上げながら倒れていた。

その男たちは手足が逆のほうに向いていたり至る所に傷を持っている。

「何があつた…?」

「バ、バーサーカーだ…うう…」

一番近くにうめき声を上げている男に問うと、バーサーカーと言う答えだけが返ってきて

それ以外は特に返してこなかった。

見るとその男は完全に痛みで気絶したようだ。この調子だと他の無事そうな男に聞いても意味がないだろう。

だが、しかし

「狂戦士とは面白い二つ名の者がいるな」

奥から大男が此方に向かって進んでくる。それに合わせて竹刀袋から木刀を取り出す

この木刀は中に鉄の芯を入れていて真剣そのものと同じくらいの重

さという物だ。

「まだいるか、カタツムリがッ!!」

「月が美しい、戦いに相応しい月だ。貴様はどう思うっ?」

その身にそれだけの価値があるかな?

この夜、暗殺者と狂戦士の戦いが始まった

第9話（前書き）

あれ？．．．．長く書こうと思ったのにたつた．．．これだけだと．．．

え．．．？物干し竿？まだまだ使えない．．．
バーサーカー？なにそのかまs（ぐふ

はい、微妙な長さですが更新です。相変わらず戦闘描写が．．．

第9話

第9話

「お前はすぐに潰れるなよ！」

バーサーカーの拳が言葉と共に襲い掛かってくる。それを体を少し右に傾けて避ける

それに続き、蹴りや殴りをしてくる。

その攻撃はバーサーカーの名に相応しいほどリズムが読めなく、完全にランダムな攻撃だ

「ふむ、『無型』か。その名に相応しい型だが、ちと力不足じゃないか？」

迫りくる攻撃を最小限に避けながら、淡々とした口調で言う

事実、バーサーカーの攻撃が目に見えて分かるのだ。いくらバーサーカーに才能があったと

しても今のままじゃただ見切られて終わるのだ。

「クッカッカッカッカッ！」

「戦いが始まったばかりなのに、狂ってしまったては楽しめぬではないか？」

「む！」

突如襲い掛かってきた蹴りを木刀で受け流す。

木刀で受け流した理由は急に攻撃の鋭さなどを増したバーサーカーの攻撃が完全に見切れなかったのだ。

だが

「なるほど、面白い！」

「ふはは…いいねえ。俺の戦いの渴きを癒してくれ！」

「では、次は此方から往くでしょう」

そう言いながら、バーサーカーに向けて鎖骨を狙い袈裟切りを放つ。

当然避けられるが、これだけでは終わらない。

袈裟切りから木刀の向きを即時に変えて逆袈裟斬りを放つ

ビュン

木刀は風を切る音を上げながら、バーサーカーの脇腹を切りつけた。

バーサーカーがそれを避けようとしたらしく、傷は浅い

やはり先ほどからバーサーカーの様子が可笑しい。脇腹を木刀とはいえ、切りつけたのに特に反応を示さない。

「クツクツク、そうだ俺にスリルを味合わせてくれ！！！」『バーサクモード発動』」

ガッ！！

「ぐふっ」

急にバーサーカーは、先ほどとは段違いの速さで、此方に近づき顔を殴ってくる

ただ殴られるわけにはいかないので敢て、重心を後ろに下げ衝撃を和らげる

完全には和らげられないので、顔に痛みを感じる。

でも、それだけでは終わらない

右ストレート、アッパー、回し蹴り、跳び蹴り、とことん攻撃といえるような攻撃をしてくる。

その、あまりに変幻自在な攻撃に、完全に反応がし切れず体に傷が増えていく。

「サッキマデノ、イセイハドウシタ！？」

「オレヲタノシマセロ！！」

体の痛みを耐えながら、こういう一種の天才のような者のミス……つまり自分にとっては好機を待つ。ミスをしない人間などいない。完全な人間などいないのだ。

「ウララララララー!!」

次々と体に突き刺さっていく攻撃を今できる最小限に痛みを和らげるよう致命傷になり兼ねない場所の攻撃を体をずらして致命傷を避ける。

典型的な動のタイプだ

勝機は必ず来るはずだ、相手は完全に自分の力に飲まれ、半ば狂っているような状態だ

昔、前世で見た動のタイプとも言えるバーサーカー……ヘラクレスは狂っていても、その主の命令には絶対で守るうともしていた。

自分が受け継いだ能力のアサシン……佐々木小次郎は、自分が架空の人物だとしても、嗤いその僅かな時間を戦いを楽しむ事に費やした

なら、刹那という短い時間を自分も楽しんだほうがいいじゃないか

「シネ!!」

そして待ちに待った時が来た

風流し

バーサーカーが最後に止めを刺そうとする瞬間を、風流しで攻撃を受け流し、バーサーカーをよろけさせる。

だが、これだけでは終わらない、いや終わらせないそれから、手に持った木刀で弧を描き、自身が持つ秘技をする動作に入る

「中々面白かった。敬意を持ってこの技で倒そう」

秘剣・燕返し

木刀から繰り出されるのは縦軸、横軸、囲む円の軌道の弧を描く刃横斜め縦の3つの斬撃を、荒削りだがほぼ同時にバーサーカーに向けて放つ

「ぐふっ」

バーサーカーが口から血を吐き出すのを見て、その場所を後にする

嗚呼、
今宵の戦いは楽しかった

第10話（前書き）

ははは…駄文なのは変わらないがとりあえず連続投稿するぜえ…
もう無理だ…燃え尽きた

戦闘描写苦手、日常描写苦手 あれ？これ駄目じゃね？
はい、いつもの駄文ながらどうぞ！

第10話

第10話

兼一が結果的に筑波にやられた
やはり、校舎の窓から逃げ出していた事がばれてそのままやられたよ
うだ。

なんとかしてあげたかったが下手に行動をすると、そのまま兼一が
更にやられる
可能性があった。

兼一がやられているのを、ただ目の前で見ることはできなかった。
今はもう僅かにしか残っていない原作知識が助けることを駄目だとい
うふうに邪魔を
していたのだ

「……梁山泊に運んでやる」

校舎裏で気絶して倒れている兼一を背中に背負い梁山泊目掛けて走
る

兼一はもう色々な処を内出血やら打撲やらしてボロボロな状態だ
通行人は気絶している兼一を背負っている事にびっくりしているが
そんな事にしない
背負いながらの状態で全力で遁走している途中、兼一が目覚めた

「大丈夫か…？兼一殿」

「佐々木君か…ごめん…」

「何を謝る？私に出来る事は運ぶ事くらいしかできなかった。舌を噛むから喋るなよ」

いつもの、おどけた口調を止め、真面目に話す。
それからというものは、兼一は何も喋らなくなり、無言になった。

梁山泊に着くと、まず先に兼一を岬越寺殿の所まで連れて行く
幸い骨折などはしてなかったようで、大丈夫だった。
健一を岬越寺の場所に置いていき梁山泊の庭に行く

「美羽殿、今は兼一殿に話しかけないほうがいい」

「え？兼一さんがどうしましたの？」

無言を貫くとそこで逆鬼殿から思わぬ横槍が入る。

「やめとけ！美羽」

「逆鬼さん！」

「男にはな。」「女にや見せたくない顔」つてもんがあるんだよ！！」

「では」

そう言い、その場を後にする。そのまま師匠の所に行き、修行をしていく。

いつも通り修行をきちんとしていく。
自分が他人に構っている時間は無い。今はただ修行をして強くなればいい

原作知識に在ったあの時まで

その翌日から兼一の修行は今までやらなかった技の修行に入った

「兼一殿、死ぬなよ？」

「そついうなら助けてよ！」

「フツ！無理に決まっているだろう。私も危ない状況な「ビュン！」
今掠りましたよね…？」

「余所見…よくない…」

兼一はアパチャイ殿とミット打ちならぬ地獄のスパーリング。そして自分は飛んでくる

手裏剣を避けたり、弾いていく修行

兼一のほうはアパチャイ殿が手加減ができてないので殴られて気絶することがよくある

自分のほうは、一歩間違えば手裏剣が刺さる
どちらも危険だ。

だがこの危険なほど、その分上達するのが感じるので辞める気にもならない。

「む？どうしました。師匠」

「何を…生き急いでいる…？」

ぱつと目が見開く。驚いた、まさか師匠にこんな事を言われるなんて思ってもみなかった

だが、ここは誤魔化さねばならない。

軽く疑われるほうが下手に知られるよりはマシだ。

「いや、生き急いでなのいませんよ？師匠」

「そう…か…」

そうして、その日の修行を終えた。兼一のほうも、何やら逆鬼殿が教えたりしているので心配はないだろう。

結論から言うと兼一と筑波とやらの戦いは兼一の勝利で幕を閉じた空手の技からの中国拳法、更に柔術か…

「兼一殿は、才が無い身でよくあそこまで出来るな…」

やはり面白い

フツと軽い笑いが零れた

第10話（後書き）

D of D までは内容だいたい構成できてるけど、いざ書くとなると
きついなあ

第11話（前書き）

はい疲れました。10万アクセス突破&1万5千ユーニクアクセスが突破しました。ありがとうございます。あとがきのほうで軽いアンケートしてますのでよかったらお願いします

第11話

第11話

いつも通り、荒涼高校の授業を適当に受けて、梁山泊に向かう途中

「おや、逆鬼殿ではないか？」

「おう、一騎か、ちょうど酒を買ってきた所だ」

「買い物帰りですか。自分は梁山泊に向かう途中です」

「んじゃ、軽く歩いていくか」

そう言い、梁山泊まで、一人の大男：逆鬼至緒と一人の優男風の男
：佐々木一騎が

一緒に歩いていて。通行人からすれば実に奇妙な光景だろう

逆鬼殿は酒が入った袋を担いでいるし

自分は、普段の学生服に鞆と二人のギャップが大きい

「ん？あれは兼一と美羽じゃねえか」

「む、どこですか？」

「ほら、あそこの資材置き場だ」

そこまで言われて、目を凝らして逆鬼殿が指を刺している所を見ると、微かに二人に

相手に何人も囲んでいるような光景が見てとれる。

兼一殿はともかくして、美羽殿が居れば大丈夫だと思うのだがな

「兼一の様子を見に行ってみるか」

「大丈夫だと思いますが、承知しました」

あくまで、急がないで歩いていくペースで資材置き場に向かっていく

しかしながら、逆鬼殿は弟子をとらない主義と聞いているが、実際は兼一殿が

心配なのかな？そうでなければ岬越寺殿の修行や馬殿の修行をしている兼一殿を見ていないだろう。

そうこうしている間に、兼一殿と美羽殿の所まで着いた

兼一と美羽はじりじりと狭められている

「いい雰囲気じゃねーか!？」

「兼一殿、大丈夫か？」

「逆鬼先生、それに佐々木君!!」

「いいな。楽しそうで。」

兼一は逆鬼殿が来た事で、囲まれている状態ながらほっとしている。

でも、逆鬼殿は、ただ見に来ただけだと思うからまだほっとしちやいけないのだから……

対する、逆鬼も安心したような兼一をどこ吹く風というふうにして
いる

その様子を気に食わなかったと思われるサングラスに木刀を持って
いる不良が逆鬼殿に
襲い掛かった。

「んだっ！てめえら」

「逆鬼殿、ここは自分に」

「おう、んじゃ任せた」

逆鬼殿に襲い掛かってくる不良に対して、逆鬼殿に許可を貰い倒すことにする
この程度なら、逆鬼殿なら一睨みで倒すだろうが、自分は試したいことがある。

「死ねや!!」

「では!!」

無刀取り

右足を前に大きく足を開いた姿勢に、背中を丸め両手をだらりと下げ身構える
不良が木刀で正面から斬りかかってきた瞬間に、不良の懐に潜り込み、その木刀を取り上げる

「え？」

「眠れ」

驚いた表情をしている不良の首に目掛けて手刀で気絶させる
周りの反応は以下の通りだ

逆鬼殿と美羽殿は至って普通の表情をしており、兼一とその他の不良達は口をパクパクしていたりする。

「おう、片付いたか。んじゃ帰るぞ」

「承知」

兼一に何かの型を教えたらしい、逆鬼殿はもう用はなくなったという風に、帰ると言いそのまま帰ってしまった。

「アパチャイが探してたぞ。さっさと帰れよ。」

「では、兼一殿に美羽殿」

逆鬼殿に遅れないよう、すぐに急いでいく

第11話（後書き）

10万アクセス突破を記念して閉話を作りたいと思います。

内容は

1：Fateからアサシンこと佐々木小次郎との話

2：主人公がマジ恋の世界に行く話

3：しぐれとの修行を始めたばかりの初期の話

正直3はまったく構成が思い浮かばない。次の更新まで受付ますので
できれば、よろしく願います

第12話（前書き）

はい、遅れました

だが相変わらずの駄文くおりてい

アンケート結果は2番に決まりました

第12話

日曜日

梁山泊に行つてみると、兼一がもの凄く落ち込んでいる姿でいた。

「兼一殿は、どうしたんだ？」

「ああ一騎君か、どうも買物から帰ってきたらあの調子なんだ」

「ま、青春は悩むためにあるよーなもんだ！ほっとけ」

修行にもならないくらい、落ち込むとなると、何があったんだ？

兼一殿の事だから、また不良がらみだと思うが、このまま梁山泊で修行を続けていれば

大丈夫な事だろう。

しかし、何があったか心配だな。話しかけてみるか

「兼一殿、どうした？」

「ああ佐々木君か、ちよつとね……」

「また？不良絡みか？」

「うん…、今日襲ってきた不良の中にナイフを使ってきた人がいて…ほら、僕ただで

さえ度胸が無いほうだから…」

「ようする、武器の対処法か、使い方を習いたいのだな？」

武器に関しては一人、もの凄く身近な人物がいるのだが、あの修行を兼一が耐えられるか

が心配だ。金属製の物を持てば、たとえ、それが斬る物じゃなくても斬ってしまうような

人の修行だ…

しかも、その人…師匠が今兼一の後ろに立っている…多分、兼一の話が途中から聞いていたのだろう

「岬越寺先生あたりに、対武器戦を習うか…でもなんかとんでもない練習させられそう

だしなあ…」

「兼一殿、おゝい兼一殿」

駄目だ…気づいてない…完全に自分の世界に入ってしまった…、その横では師匠が何かのアピールをするように様々な武器を振るい続けている…

あれ？これ、このまま兼一殿が気づかなければとばかりがきそうな予感が…

「うゝん、案外、逆鬼先生はていねいに…」

トン

師匠が兼一の、おでこに米粒を付けた

ピツシュンッ

兼一のおでこにある米粒目掛けて抜刀した

当然、急に何のことか分からない兼一は叫び声を上げている
しかし、米粒が見事に半分に切られている

「流石、師匠御見事」

「えっへん…」

「しぐれさん！何をしていますかゝっ！？それに一騎さんもそれ

を見てないで

止めてください！」

「ははは、師匠を止めるなんて無謀な事できんよ」

実力差も一目瞭然なのに、止めようなんて無茶を通り越して無謀だ。

それに気づかない兼一殿が悪い！（開き直り）

結局、師匠に教わることになった兼一は道場に連れて行かれた
美羽殿とアパチャイ殿、それに馬殿がやりすぎないよう見張ると言
ってるが

危ない気しかない…

む！

「師匠、いきなり真剣は私じゃ無いんだし無理だと思っぞ」

「…ん、そうか…」

少し目を離れた隙に、真剣を取り出し兼一に短刀を投げつけている所だった。

あ…

兼一が短刀が急に飛んできたことに、腰を引けて、さめざめと泣いている

師匠が懷からスプーンを取り出した。

「これならいいでしょう。」

「本当に？絶対？」

「いかん！師匠の場合、金属製なら「シュバババッ」…遅かったか」

ピツ、パク、ズル、チン

兼一の持っているスプーンは両断され、道場着は細切れに、さらに美羽の着ている服も切られ、馬殿に写真を撮られている

そこへ、長老がやってきた

「まあ、なんだ。要は当たらなければナイフもスプーンもしょせん、金属の

塊にすぎんて。じゃが、しぐれはどちらでも必ず当てるからのう。

冷静によく観察してスキを探るのじゃ！」

師匠と兼一は新聞紙を丸めた物を手に修行を開始した。

それと、美羽殿の写真を撮っていた馬殿がいつのまにか、長老に取り押さえられていた。

ナイフの構え方は真反身、使わない手は腰、体を真横にナイフの一直線上に体を隠す、か…

「兼一殿、腕を前に出しすぎだぞ」

「うわ!!」

腕を前に出しすぎていたせいで、そこを新聞紙で叩かれる

「ちょっと一騎ちゃん、しぐれどんと一回やってお手本見せたらどうだね？」

「む、私がか？ふむ、ならやってみるか。兼一殿ちょっと見ていてくれ」

丸めた新聞紙を片手に師匠に切りかかる

パンッ

新聞紙と新聞紙が当たった乾いた音が鳴る。それを横に弾き喉に目掛けて新聞紙を突く

グルン

師匠が後ろ側に引きながら、新聞紙でそれを抑える
師匠の隙が兼一とやっていたときより無く、攻めにくい

それから、パン、パン、と新聞紙が当たった音が鳴り、少し経ったあと

一気に攻めようとして、新聞紙を突くように振るったが横に弾かれてしまった

「ちょ…」

もちろん、それは見逃される筈も無く、首に新聞紙を突きつけられてしまった。

「やはり無理か…」

新聞紙を離し、手を上げ降参というふうに表示する

「まあ兼一殿、こんなふうだ」

「あ、うん、ありがとう」

呆気にとられていた兼一に一言、言い先ほどいた所に戻る

第12話（後書き）

相変わらずの駄文ですね・・・

間話 I F（前書き）

はははは…正直すまんかった
予想以上に出来が悪い…

間話IF

IF もしかしたら

「ここが川神院か…師匠も、いきなりここに行けとは無茶を言う」

目の前には、世界的に武術で有名な寺院、その名も川神院。この地を訪れる

者は皆、力を求めこの川神院に入門する。元は関東三山の1つ「川神院」。厄除けの寺院として名高く市の名前に

なるほど。「己を高め気力で厄をも祓う」という考え方で鍛錬場所として有名。行事も数多く行われている。

「確か、川神鉄心という人を訪ねろって言っていたな」

思案顔のまま川神院の門を叩く

「失礼。川神鉄心殿は、いるか？」

「ん？爺に何かようか？」

対応に出てきたのは、白い羽織を肩に羽織っている強気そうな女であつた

「名乗り忘れたな…、剣と兵器の申し子香坂しぐれの弟子、佐々木一騎だ」

「へえ」

それを言うと、目の前の女は以下にも面白そうという顔をして、此方を見てくる
できれば早く、川神鉄心殿に会いたいが、目の前の女の立ち振る舞いを見て、それを諦める

「川神鉄心殿に取り次ぎ願いたいのだ」「ビュン」「ぬ！」

いきなり此方に向かって、拳を突いてきた。当るわけにもいかない
ので、それを横に躲す

「やっぱり、このぐらいなら避けるか」「ニヤ

「いきなり何をする!?!」

今もニヤついている表情の女に問う

「何、簡単な事だ。爺に会いたいなら私と勝負しろ！」

「私としては、早く鉄心殿に取り次ぎ願いたいのだが…」

内心、正直勝てる気がしない。

「うわ、なにをする！」

「ここだと、爺達が煩いからな、ちよつとついて来てもらうぞ」

いきなり首根っこを掴まれ、驚くほどの速度で連れて行かれる。途中振りほどこうとしたが、掴む力も凄まじく振りほどけなく無駄に反抗しただけであつた。

拉致……もとい連れて行かれる事、ほんの数分、多馬大橋の下、多馬川の土手

まで来て、ようやく離された。周りには学生服を着た生徒と思われる者達が此方

を見ており、人だかりができていた。

近くで会話が聞こえる「お、百先輩きたぞ」「キャーッ」「挑戦者と百先輩どっち勝つかトトカルチヨ始めるぞ」「馬鹿、百先輩が勝つに決まってるだろ」

ああ…賭けまで始まつてるし

「今更、話を聞くわけないか…、はあ…」

「さあかかってこい！」

におい立ちしている目の前の百先輩と呼ばれた女に、ため息を吐きながら護身用に

持っていた木刀を取り出し構える。

バトルジャンキー

傲岸不遜な態度に、戦闘狂な所、師匠達と相対したときに感じるような威圧、まったくもって勝てる気がしない…

「致し方ないか…では逝くぞ…」

何か違ったような気がするが、気にしない

今の自分の全速力で駆け、目の前の相手に木刀で斬りかかる

それを手で軽くあしらわれるが、まだまだ食らいついていく

鬼殺し

首、目掛けて当身を狙う

「なんだ、こんなものか？」

横に軽く躲される

「ぬう」

一旦、距離をとり、体制を整える。

「できれば、使いたくなっかたが…この際使っしかないか…」

それは、「剣と兵器の申し子」香坂しぐれ、に弟子入りして教えてもらった技の一つだ

今までは、佐々木小次郎の技を自分の物にする為、使っていなかったが本来なら使ってもいい技だ。

木刀を構え、目の前の女を見据える。

香坂流 相剥斬り

余裕そうに構えていた、右腕を寸分違わずに木刀で斬りつける。

それは、確かに右腕に当り、手ごたえがあった。

なのに女は未だに余裕な顔を崩さずに、尚樂しそうに笑みを浮かべていた

「やられっぱなしも、面白くないな。そろそろ私からいくぞ！」

その瞬間、先ほどまで相対していた相手が消えた

反射的に後ろを振り返って見ると、不適な笑みを浮かべている女が一人

そして此方に右腕を振りかぶっている

その右腕には気が込められており、当たたらただじゃ済まないだろう…

「ぐふっ」

当然、避けれる訳も無く当り、土手の近くまで吹っ飛ばされる

「あゝあ、剣と兵器の申し子の弟子って言ったから、やったのにこの程度か…」

「誰が、この程度だって…？」

砂を掃いながら、立ち上がり残念そうな顔をしている女に言う

「お、立ち上がれるのか、そうこなくっちゃ私が面白くない」

「ふん！」

木刀を片手に持ち、余裕そうな顔をしている女に向かって、駆ける

女に向かって木刀を振りぬいた瞬間

「こらあああ！百や、香坂殿の弟子がまだ来ていないと思ったたら何をしとるかあああ！」

女と自分の間に急に、立派な髭を携わえた老人が現れた。

その老人は、百と呼ばれた女にそのまま説教を始めてしまった。

「いったい、何だっただ…」

間話 I F（後書き）

アンケートに協力してくれた方々申し訳ない
予想以上の駄文に仕上がってしまった。
それと私にはマジ恋は駄目だった

第13話（前書き）

書き下ろしなので誤字、など多くあるかも
後日訂正いたします。

第13話

13話

いつもどおり、学校の授業を適当に受け答えて昼休みになった頃
兼一はまた厄介な者達に目を付けられている。

その証拠に、サングラスに短髪の巨体な男と、いかにも優男そうな
男と小柄な男が

兼一を訪ねて、クラスまで来ている
現に今も

「白浜兼一はいるか？」

その様子に、クラスはもう怯えきってしまっている

しかし、このクラスに兼一はもういない、既に屋上に避難してしま
ったのだ。

「うげっ！、ラグナレクの”技の三人衆”」

クラスメイトの誰だったか？名前は忘れたが栗頭と尖がり頭が、心
底怯えるように言った

兼一も、こんなのに目を付けられるは大変だな

こんなのに構っていたら時間が無くなるので先ほどまで飲んでいた
湯飲みを片付け

兼一がいる屋上に向かおうと教室を出ようとすると

「おい、てめえ、どこいくつもりだ？」

先ほどまで、暴れていたサングラスの巨体に呼び止められた。

「いや、持ってきた飯だけじゃ物足りなかったので購買にいくだけさ」

「ふん！」

そう言うと、興味を無くしたように、そのまま振り返ってしまった
そのまま、軽く自販機でお茶を買い屋上に向かう

屋上にいくと、何故か兼一と新島が殴り合いをしていた

「これは…？美羽殿何故こうなった？」

「あ、ああ一騎さんでしたか。これは男の友情ですわ！」

「いや、明らかに違うと思うが…」

何故か目を輝かせている美羽から目を離し、横で殴り合いをしている

二人に向けて、軽く木刀で突いて元に戻らせる

「痛いっ！何すんのさ」

「ぐ、佐々木てめえ」

正常に戻った二人は、此方を睨み付けてくる

「先ほど、クラスで3人組が兼一を訪ねて来たんだが、また厄介なのに」

目付けられたなあ……」

「あ、そうだった。新島、早く情報を！」

「まあ、待て、急かすな。ほらよ」

そう言っていると、新島は懷から学園ランキングという機械を取り出して説明し始めた。

「宇喜田考造。3年生、名門の柔道場にいたが、勝つためにどんな手

でも使う品性の無さから破門！得意技はその巨体から投げ落とす肩車。」

「ああ、そやつなら先ほど教室で暴れてたぞ」

「ええ！？」

先ほど、いた短髪のサングラスの巨体の事を思い出し、伝える。
案の定、兼一は驚いている

「そして、やばいそうなのが、こいつ。この武田一基、3年だ
こいつは、なんと！元ライト級のボクサーだ！」

「ボボボ…ボクサー…っ！！」

「ほお、字は違いが同じ名前とは運命を感じるなあ」

先ほど買ったお茶を飲みながら、返事を返していく
兼一の怯えようは、やばいほどになっているが、梁山泊で修行する
なら恐らく
大丈夫だろう。

そのまま昼休みは終了し、午後の授業に差し掛かっていく
やはりというか、授業は適当にやり過ごして放課後

兼一は、修行で培った足の速さで梁山泊に走っていく

「兼一殿も、はやくなったなあ…」

「毎日走りこんでいるだけ、ありますね」

その後が続くように私達も走っていく

第13話（後書き）

はははは・・・駄文

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5234t/>

剣豪を目指す道

2011年8月30日19時39分発行